実践理論の運用過程に関する一考察†

―「目的」と「効果」との関係性に着目すべき現実的必要性―

佐々木英和*
宇都宮大学地域連携教育研究センター*

宇都宮大学教育学部教育実践紀要　第4号　別刷

2018年2月28日

宇都宮大学教育学部教育実践紀要　第4号　2018年2月28日

実践理論の運用過程に関する一考察†
―「目的」と「効果」との関係性に着目すべき現実的必要性―

佐々木英和*
宇都宮大学地域連携教育研究センター*

教育実践において、「実践理論の運用過程」を考察すると、以下のことが判明する。まず、実践理論の運用対象となる「現場」や「実地」とは、それ抜きには「実践らしい実践」が成り立たない基盤である。次に、ときに成り行き任せに流されることもある「運用経過」について戦略的・戦術的に洗練すれば、「仕組み」・「仕込み」・「仕掛け」という切り口が有効である。最後に、「結果」と「効果」と「成果」とを区別した上で、「目的」と「効果」との関係を問うことが必要である。このとき、運用次第で「効果」が変わるので、場合によっては「表向きの目的」とは違う「本当の狙い」が隠れていることに気づけることがある。

キーワード：過程、運用、実業、現場、仕組み、仕込み、仕掛け、結果、効果、成果、目的、託け

はじめに

筆者は、教育実践における「実践」のあり方それ自体を原理的に掘り下げる作業を続けているが、「実践理論」がまさに実践される営みについて、「運営」という言葉を与えている[1)]。本稿は、「実践」の具体的内容について、「実践理論を運営すること」に投射して解釈し直すことを目標にしている。

そこでは、「運営」の“過程”すなわち“物事が変化し進行して、ある結果に達するまでの道筋”[2)]を考察対象とし、始める前の段階から終わった段階までを理論的に考察する手はずにしている。第一に、運営過程を語る上での出発点に位置する「前提」に関して、事前想定すべき「運用対象」の明確化を試みる。第二に、始めてから終わりに至るまでの「経過」について、その制御可能性を考察する。第三に、運営の過程の帰着点である「結果」についての概念整理を試みる。

† Hidekazu SASAKI*: A Consideration of the Process of Operating Practice Theory: Realistic Necessity for Paying Attention to the Relationship between “Objective” and “Effect”
Keywords : Process, Operation, Business, Spot, System, Charge, Device, Result, Effect, Outcome, Objective, Distortion
* Center for Education and Research of Community Collaboration, Utsunomiya University
（連絡先：sasakih@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

1　「実践理論の運用対象」をめぐる前提的議論

まずは「机上」のレベルで、「まさに実践らしい実践」とは何かを確認する。「実践理論の運用対象」を明らかにすることが、考察の出発点になる。

(1)「実業」と「現業」

筆者は、「実践らしい実践」を象徴する言葉として、「実業」に注目する。というのは、“ぎょう”と読むときの“業”という言葉が“なすべきこと”や“仕事”や“わざ”とか“暮らしの手だて”や“生業”や“職業”を意味することを重視するからである[3)]。むろん、“実業”を“じつぎょう”と読むときの意味は、“農業、工業、商業、水産などのような生産、製作、販売などをする事業”というような具体的な産業が例示され、意味が限定されてしまうという問題点がある[4)]。だが、“実業”を“まめわざ”と読むときには、それが“実務的、実用的な仕事”と定義されることに着目したい[5)]。さらに、“実業”を“じつごう”と読むときには、仏教用語で“身・口・意で善悪などの行為を実際にすること”を意味することにも要注目である[6)]。第三者から見ても、その当事者が何かを実際的かつ具体的に行動している様相が、「実践の実践たる所以」を体現している。いささか操作的だが、「業」という漢字に、「実践らしさ」の象徴的意味合いを読み取りたい。

次に、何かを実践するといっても、直接的な性格の強いものと間接的な性格の強いものとは対比でき

る。たとえば「実業」たる自動車産業において、自動車メーカーの業務を例に取れば、自動車の部品を加工したり組み立てたりする作業は「直接的実践」とみなせるのに対して、製造工程を事務的に管理する作業は「間接的実践」とみなせよう。前者には、“現場の業務”と定義される“現業”という言い方がなされ、“事務や営業などでなく、工場や作業場で行う労務”と示されている[7]。よって、「実業」の中でも、「現業」こそが「まさに実践らしい実践」とみなせるという立場に立つ。

(2)「実地」と「現場」

筆者は、「理論」との対比において「実践」について規定したことがある[8]。だが、その考察は、「実践」そのものを直に深めたという域には至っていない。このたび、実践理論を運用することの意味を考えるに当たり、改めて掘り下げ直したい。

まず、“実践”の定義として、“自分で実地に行ない、行為、動作にあらわすこと”と示されたものがあることを強調したい[9]。ここで、“実地”の定義とは、“物事が実際に存在したり行なわれたりしている場所”のことであり、さらに一歩進めて、“考えを確かめたり、応用したり、また、身をもって経験したりする実際の場”とか“実際の場で物事を行なうこと”である[10]。だから、仮に「実践の実践たる所以」を強調するとすれば、それは、“実際の場で身をもって経験する”と定義される“実地を踏む”という言い方に集約されるはずだ[11]。言い換えれば、「踏まれる実地」こそが、実践理論を運用する対象であると同時に、それ抜きでは成立しない「運用基盤」だとみなせるわけである。

さて、「実際の場」としての「実地」と同様に扱ってよいと筆者が考える言葉として、「現場」をクローズアップしたい。「げんじょう」と読む場合の「現場」とは、“物事が現に行なわれている、また、行なわれた場所”を意味する[12]。「現場」を「げんば」と読んだときには、“物事が実際に起こったその場面や場所”というように、ほぼ同じ意味があるが、“まだ事件がつづいている場合やそのあとがなまなましく残っている場合にいう”というニュアンスが付け加わり、“物事を実際に行なう場所”として、“建築、工事、製造、制作などの作業をしている場所”といった具体性を伴う[13]。

とにかく、「運用」を主軸に置いた言い方をすれば、方法を運用する着地点について、「現場」とか「実地」と呼ぶことができよう。見方を反転すれば、「現場」とか「実地」がなければ、実践は実際的に成り立たないのである。

2 「実践理論の運用経過」の制御の視点

実践理論が現場や実地で運用されていけば、実践的には時間的経過を伴う。“経過”とは、“物事がうつりかわってゆくこと”とか“なりゆき”のことである[14]。本稿では、「運用経過」という言葉を導入したい。

(1)「計画的運用」と「実際的運用」

一般に、何らかの計画が開始されたら、それ以降の経過を把握する言い方として、「進捗状況」という言葉が用いられる。たとえば議会などで、「公園整備について、計画の進捗状況はどうなっているのか？」などという質問がなされる。この「進捗状況」という表記には、計画を進めていくことは基本的に順調なはずだという暗黙の前提が含意されている。というのは、“進捗”とは、“物事がはかどる”[15]という意味であり、“はかどる”とは、“仕事が順調にどんどん進む”という状態だからである[16]。

たしかに、計画水準にまで高められた実践理論を現場で運用する際には、この「進捗」という言い方を用いるのが適切である。「計画」を前提とした場合、「実践状況」とは「進捗状況」と言い換えうる。だが、仮に用意周到に実践を始めることができたからといって、実地レベルでは、その後の過程において計画通り順調に物事が進んでいくとは限らない。それどころか、必ずしも思い通りにはいかないのが、多くの人の経験則的な実感であろう。論理的に考えても、現場や実地で実践理論を運用することは、頭の中で考えたこととは別次元であり、必ずしも思い通りにいかない中での実践になる必然性がある。

まず、現場では、「“一筋縄”で行かない」、つまり「“普通の方法”や“尋常一様の手段”だけではうまくいかない」という事態に直面することが度々ある[17]。また、“機に臨み変化に応じて、適切な手段を施す”とか“型通りの処置にとらわれない”という意味で、“臨機応変”の対応を迫られることも多かろう[18]。時に、綱渡りの対応を求められることもあるかもしれない。総じて、“事前に予想した範囲を越えている”という意味で“想定外”[19]のことが、現場ではしばしば起きる。

よって、実践理論を現場で計画的に運用するに当

たって、可能な限り事前に「想定外を想定する」という姿勢も求められてくる。これは、「計画的運用」を「実際的運用」に切り替える柔軟性につながる。

もちろん、自然災害などの中には、現在の科学水準や人智を超えている事態の発生などもあり、「想定外の想定」それ自体に実際的限界がある。だが、一連の成り行きを見守りつつも、ベストを尽くしたりベターを試みたりしながら、少しでもやれることをやるほうが、不確定要素の高い現場でも、失敗確率が下がり成功確率が上がるのではないか。“人事を尽くして天命を待つ”とは、“力のあらん限りを尽くして、あとは静かに天命に任せる”[20] という意味だが、この箴言は、裏返せば、安易に成り行き任せで流され続けるべきではないという戒めである。

(2)「仕組み」と「仕込み」と「仕掛け」

状況によっては制御不能に陥りかねない現場を、少しでも制御可能に近づけるためには、「運用」を戦略的・戦術的に洗練することが有効である。

ここで、唐突に思われるだろうが、“幸運であること”を意味する“仕合わせ”という言葉を持ち出し、それが元々は“よい場合にも、悪い場合にも用いる”といった性格を持つことに着目する[21]。“事の次第”という意味で「仕合わせ」が用いられるとき、一方で“なりゆき”といった、個人の主体性を超えた意味合いを持つが、他方で“物事のやり方”といった主導的意味合いがある[22]。筆者は、実践理論の運用経過について、主体的制御が不可能な面と可能な面との両方に目配りしながら、「物事のやり方」という意味での「仕合わせ」について、「仕組み」・「仕込み」・「仕掛け」の三要素に構造的に分解して理解することが有効だという立場に立つ。

まず、“仕組み”とは、“物事の組立て”や“構造”や“機構”という意味が基本になる[23]。ただし、“仕組む”とは、ただ漫然と組み立てることではなく、“工夫して物事を組み立てる”[24] ことである。また、“仕組む”は、“目的に合うように、くふうして（趣向を考えて）作る”と定義されることがあるように、目的合理的な行為である[25]。実際、“仕組み”が“事をうまく運ぶために工夫された計画”[26] と定義されることがあるように、それは、戦略や戦術を遂行する上での土台なり基礎なり枠組みなりを提供する概念なのである。

次に、“仕込む”にも、“工夫して中に納め入れて作る”[27] という意味があるように、ただ漠然とした行為ではなく、どのようにして中身を入れるかが鍵になる言葉であることに注目する。また、“仕込む”が、“内部に装置する”[28] と定義される場合には、仕込まれるものがどんな中身かがポイントとなる。よって、“仕込む”が、具体的な実践として、“飲食店などで、料理の下ごしらえをする”[29] と定義され、食材が主題化している場合には、どのような内容をどのように組み合わせて入れるのかのメリハリが重要となる。実際、“仕込み”は、“商店、飲食店などで、商品や材料などをあらかじめ買い入れたり手を加えととのえたりして、すぐ売りに出せるように準備すること”[30] と定義されていることに象徴されるように、何かを実践するための目的合理的な入念な行為であることがわかる。

最後に、“仕掛け”とは、“働きかけること”であるが、やはり“特別な工夫をしてつくられたもの”という定義も付されていることを確認しよう[31]。“仕掛ける”という動詞には、“作用するように、装置・工夫などを設ける”という意味がある[32]。つまり、「仕掛け」とは、「装置」や「工夫」といったキーワードを媒介として、「仕組み」や「仕込み」との密接な関連で考えていける概念である。実際、“仕掛ける”という動詞には、“条件が整えば効果・効力が発揮出来るような仕組みを準備する”という意味もある[33]。“仕掛ける”は、“相手に対して、こちらから働きかける”だけでなく、“相手が乗ってくるように扱う”というように、独りよがりでなく、相手の立場に立って反応を引き出そうとする積極的に工夫した働きかけである[34]。

このように、「仕組み」と「仕込み」と「仕掛け」とは、各自が機能的かつ構造的に把握できる三つの切り口でありながらも、創意工夫をつうじて相互に関連しあう。厳密な言い方ではないが、いわば「器」に喩えられる「仕組み」が存在することが大前提で、その中に「中身」たる「仕込み」を入れ込んだ上で、「仕掛け」によって「動き」や「変化」を与えていくことが必要不可欠である。喩えて言えば、鍋に食材を入れておくだけでは、鍋料理は完成せず、“煮炊きするために、火の上にかける”という意味で“仕掛ける”必要がある[35]。「仕合わせ」は、「仕組み」を土台にして、「仕込み」を整えた上で、「仕掛け」を働かせなければ、「仕上げ」には至らない。“仕上げ”とは、“最後のしめくくり”に相当し、結局は“物事をし終えること”に至る[36]。

3 「実践理論の運用結果」の理論的考察

何らかの実践をしていくということは、本稿にそぐわせれば、実践理論を現場に運用していくことである。この実践理論が適切に運用されようがされまいが、また実践の影響がどれくらいあるのかともかく、その善し悪しはさておき、何らかの新しい「結果」が、現場では生まれ続ける[37]。

その出来はともかく、何らかの実践の「仕上がり」について評価しなければならない場面が出てくる。このような意味での「運用結果」について、事後的に評価することが可能である[38]。そして、実践理論を洗練することを求めるならば、この「運用結果」もしくは「実践結果」について、“予測”すなわち“事の成り行きや結果を前もっておしはかる”[39] ことが必要である。

(1)「結果」と「効果」と「成果」

筆者は、「結果」という日常用語について原理的に考察することが、実践理論を洗練するためには必要不可欠だと考える。このことは、現場で実践を積み重ねれば積み重ねるほど、明らかになるだろう。

そもそも、「結果」とは、原理的には「原因」と対になる言葉である。辞書的定義にしたがえば、“結果”とは、“ある原因や行為から生じた、結末や状態”および“そのような状態が生じること”を意味する[40]。実践理論を運用した際の「結果」とは「運用結果」であり、この場合の「原因」は「実践」であり、「方法を運用すること」に相当する。

本稿であらかじめ明示しておきたい結論とは、「運用」という観点を経るならば、「結果」と「効果」と「成果」とについて概念区別すべき論理的必然性が生じるということである。一般的な通例として、「結果」と「効果」と「成果」とが、互いに区別されて用いられることは稀である。本稿は、その状況を混同・混乱とみなして、丁寧に整理しようと試みるものである。

まず、“結果”とは、“何かがもと（きっかけ）になって、新たな状態が出現したり最終的な判断が得られたりすること”および“その状態や判断”と定義される言葉である[41]。この言葉は、基本的には良いとか悪いとかの価値判断を含んでいない。具体的用例として、“よい結果を生む”と言われることもあれば、“不幸な結果を招く”という言い方がされることもあり、“意外な結果が出る”という言い方からは、良い悪いの価値判断は読み取りにくい[42]。たしかに、たとえば「プロ選手として結果を出したい」などというときには、“結果”という言葉は“優れた成果”や“優れた業績や記録”ということを意味している[43]。つまり、「結果」には、肯定的価値を内蔵させた用語法がある。だが、“「結果を出す（が出る）」などの形で、成果の意に用いられることもある”とはいえ、「結果」として“出現した状態には、本来望ましいもの、望ましくないもののどちらもある”ことこそが基本原則だとみなせる[44]。したがって、本稿では、「結果」については、価値中立的な言葉として位置づける。

これに対して、“効果”とは、“ある働きかけによって現われる目立った結果やききめ”[45] と定義されるように、数ある「結果」の中でも、際立っているものが「効果」だと限定できる。実際、“効果”という言葉は、“ある働きかけによって現れる、望ましい結果”[46] と定義されるように、数ある「結果」の中でも、どちらかと言えば「良い結果」に限定されがちである。また、“効果的な”という形容動詞は“効果がある様子だ”[47] を意味するので、それは、没価値的ではなく、価値肯定的であることを前提として、その度合いを示した言葉だとみなすことができる。さらに、“成果”とは、“あることをして得られたよい結果”[48] と定義されているように、明らかに価値肯定的な文脈で用いられる類の「結果」のことである。

ところで、「効果的な」という言い方は一般的であるけれども、「成果的な」という言い方はしない。また、“思った事とは反対の効果”を意味する“逆効果”[49] という言い方はしても、「逆成果」という言い方はしない。このことに、「成果」という言葉それ自体には、良いか悪いかを測定する意味合いはなく、もっぱら良い状態に固定されるに至った完成形だというニュアンスを読み取るべきである。「成果」とは、「結果」の一種であるのみならず、「結果」について語る際に格別の位置にある言葉なのだ。

総じて、「結果」が「効果」に絞られ、さらに「成果」に至るというように、概念は狭くなるとみなせる。「結果」はもっとも広い一般的概念であり、「結果」を評価する規範概念が「効果」で、そのうち「高度に効果的だ」と評価できる場合の「結果」に対して「成果」という言い方が当てられる。スローガン的なまとめ方をするならば、「結果は予測されるもの」、「効果は評価されるもの」、「成果は期待されるもの」と性格づけられる。

(2)「目的」と「実効性」との関係

実践すればするほど新しく生まれ続ける「結果」に対して「どれくらい効果的だったか？」という問いが導入されるとき、「実効性」という言葉が鍵になる。“実効”とは、“実際に現われる効果”のことである[50]。それは、まさに現場や実地で、程度問題として「実践結果」や「理論の運用結果」を測定する尺度となる。

ここで、その際の基準となる大本が「目的」である。というのは、“効果のあるさま”を意味する“効果的”は、“目的とするききめの現われるさま”[51]とも定義されることがあるし、“効果”が“目的通りのよい結果”[52]と定義されることもあるからである。また、「結果」がもっとも効果的になった到達点たる“成果”が、“その目的にかなった、よい結果”[53]と定義されることもある。

では逆に、そもそも「目的」は、どのように定義されている言葉なのか。辞書的には、“目的”とは、“実現しようとしてめざす事柄”とか“めざす所”や“めあて”と定義される言葉である[54]。だが、ここで、探究を止めてしまってはならず、「実現されるもの」に対して、「目的」という言葉以外のキーワードを見つけ出す必要がある。

別の辞書を引けば、“目的”は、“行動を始めるに際して、最終的な成果として期待し、その実現に向かって努力しようとする事柄”と定義される[55]。つまり、「期待される成果」として最終的な究極形態が「目的」なのである[56]。仮に「成果」と「目的」とが一致したならば、その実践に照らし合わせて「成功」とみなせよう[57]。

こうして、「成果」を、「結果」水準において「目的」との関数として把握できる概念だとみなせる。「目的」が変われば、「成果」が変わるのはもちろん、「効果的」を決める基準も変わり、「実効的」の捉え方も変わってしまう。逆に言えば、「目的」が定まっていないのであれば、原理的には「結果」を評価しようがない。したがって、「目的」こそは、実践を進めていったり、実践について評価したりする上では、常に意識されなければならない根源的な参照枠である。

(3)「建前たる目的」と「実質たる効果」

筆者の再定義によれば、「効果」は、「結果」の次元で生じた事態を測定する尺度の役割を柔軟に果たせる。逆に言えば、「効果」には、「逆効果」の場合も含めて、悪いものから良いものまで、また弱いものから強いものまで、様々な種類がある。

普通に実践していても、「結果」の水準においては、“ある物事に付随して起こる物事”という意味での“副産物”[58]が生じるのが常である。また、“もとになるものから新しく発生した勢力”という意味での“ひこばえ”[59]が、思いがけず生じてくることも多い。これらの中には、「成果」と呼ぶにふさわしいほど肯定的価値を含むものも出てくるだろう。だが、「効果」とは、多彩で程度差も大きいものである。

実際、「実践結果」や「実践理論の運用結果」の余剰として、新たに「問題」が発生してきたり、改めて「課題」を設定し直したりしなければならない場面も出てくるであろう[60]。原理的に考えても、事前に想定すべき「問題」や「課題」が生じる。よって、新しく生まれ続ける「結果」を予測するのであれば、「効果」について、一方では「期待される成果」が実現する可能性があるとともに、他方では「事前想定される問題・課題」も生じてくる可能性を考慮しなければならない。ただし、「問題」や「課題」が必ずしも、実践結果として「失敗」とみなせるかどうかは別問題であるが、諸々の対照的な要素をあらかじめ意識しておくことが肝要である。

とにかく、実質的に「目的」次元の事項に相当する「理想」・「理念」・「目標」・「方針」及び「計画」などと比較して、予測した「結果」があまりに違っていたという事態は、実践的にはよく生じる。むろん、特に意図がないまま、当初の理想や目的などが、“中身のない、形だけのものになる”という意味で“形骸化”してしまうこともあろう[61]。また、目標をしっかり見すえながら一生懸命にやっていても、やり方がうまくなかったりして、当初の計画などが“台無し”になる、すなわち“根本的な打撃を受けて、存立の基盤が失われる”という事態に陥ることがある[62]。熱心に実践していても、「目的」と「効果」との間に大きな隔たりができるという状況で終わってしまうことは度々起こる。厳しい言い方になるが、これでは、最初に掲げられた目標などが、否定的な意味で“建前”すなわち“表向きの考え”[63]にすぎなかったと、周囲から事後的に批判されてもやむをえないだろう。

(4)「隠された狙い」の存在可能性

前面に掲げられる「目的」は、その抽象度が高ければ高いほど、実践水準が具体化するにつれて、解

釈の余地を広げ、色々な「目標」を含み込むことが原理的に必然性が高く、かつ実践的にも展開する。このとき、看板として表立って言語化された理想や理念の背後に、「本当の狙い」が、「運用の妙」によって実現可能な「期待される成果」として織り込み済みである可能性や危険性を指摘できる。

たとえば、国民にとって便利であることを喧伝されたマイナンバー制度は、そのまま国家にとって国民情報を管理しやすくする便利な「国民総背番号制度」と化すが、それを結果的なものにすぎず、他意はなかったはずだと考えるならば[64]、お人好しすぎるだろう。また、国家が「治安維持」という大義名分を掲げれば、その実行・実現に対する協力を国民は拒みにくくなるので、これに便乗して過剰な権利抑制を行う役人が出てきても不思議はなく、はじめから国民を管理する体制を作り出すという狙いが隠れている可能性がある。

ここでは、「かこつけ」と読む場合の「託け」という言葉をクローズアップしたい。“託ける”という動詞は、“原因、理由、動機などを、他の関係の薄いものにむりに結びつける”[65] とか“直接には関係しない他の事と無理に結びつけて、都合のよい口実にする”[66] というように定義されるだけでなく、“おおっぴらに何かをするために、関係の無い他の事を表面の理由にする”[67] といった、大胆に行動するための目的的行為という意味合いも含んでいる。

いずれにせよ、「目的」と「効果」との関係を問い返すという理論的で抽象度の高い課題は、実は実践的に切実なまでに具体的で生々しいものである。先に示したような現実に即した予言は、将来的に「すでに生じた結果」と化したとき、その先見性が判明してくるだろうけれども、事前予測できる判断力が必要なのである。

まとめにかえて

どんなに実践的であろうとしても、理論は所詮は理論にすぎない。どんなに練りに練ったとしても、“机上の空論”すなわち“頭の中だけで考え出した、実際には役に立たない理論や考え”の水準を堂々巡りする実践理論は、その名に値しない[68]。だがだからこそ、逆説的だが、「やってみなければわからない」と諦めず、まずは徹底的に頭の中で考えるべきなのである。

－注・引用文献－

1) 佐々木英和「『実践の議論化』のための思考手順に関する一考察－『構想-実行-実現』の循環的関係－」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部 教育実践紀要』第2号、2016年所収、163 ～ 170頁。本稿は、直接的な意味では、上記の拙稿の続きに相当する。
2) 松村明監修・小学館『大辞泉』編集部編『大辞泉【第二版】上巻』（あ～す）、小学館、2012年[第一版1995年]、733頁。
3) 同上、915頁。「業＝ぎょう」には、“学問”や“技芸”という意味もある（同上）。ちなみに、“ごう”と読むときの“業”は仏教用語であり、“人間の身・口・意によって行われる善悪の行為”などの意味がある（同上、1190頁）。
4) 小学館国語辞典編集部『精選版 日本国語大辞典 第二巻』（さ～の）、小学館、2006年、342頁。
5) 小学館国語辞典編集部『精選版 日本国語大辞典 第三巻』（は～ん）、小学館、2006年、752頁。ここでは、具体例として、“裁縫など、生活次元の仕事”が明示されている（同上）。
6) 小学館、前掲辞典[第二巻]、346頁。
7) 松村監修、前掲辞典[上巻]、1622頁。“実地に行なわれる労働業務”とか“工場や屋外での現場の仕事”と定義される“現業”には、“国が行なう事業のうち生産、販売など経済的性格をもつ事業部門”という特有の意味があり、“国有林野や、かつて国営事業とされた郵政、印刷、造幣など”を指し、“地方公共団体については、水道事業、軌道事業、電気事業、ガス事業など”の具体例が示されている（同上）。
8) 佐々木、前掲論文（2016年）、163 ～ 165頁。
9) 小学館、前掲辞典[第二巻]、350頁。傍点は引用者強調。
10) 同上、352頁。傍点は引用者強調。
11) 同上。
12) 小学館国語辞典編集部『精選版 日本国語大辞典 第一巻』（あ～こ）、小学館、2006年、1827頁。
13) 同上。他には、“まのあたり”や“めのまえ”や“実地”という意味がある（同上）。
14) 同上、1714頁。“経過”の元々の定義は、“ある場所、段階などを通りすぎること”とか、“時間がすぎてゆくこと”や“時間をすごすこと”である（同上）。他には、“天文学用語”として“経

過”が用いられるときには、“天体が子午線を通過すること”や“正中”や“南中”とか、“小さな天体が大きな天体の前面を通過すること”や“惑星の月面経過など”が意味される（同上）。

15）松村監修、前掲辞典[上巻]、1886頁。

16）松村明監修・小学館『大辞泉』編集部編『大辞泉【第二版】下巻』（せ～ん）、小学館、2012年[第一版1995年]、2871頁。

17）小学館、前掲辞典[第三巻]、279頁。“一筋縄”とは、“一本の縄”のことである（同上）。

18）同上、1295頁。

19）松村監修、前掲辞典[下巻]、2116頁。

20）松村監修、前掲辞典[上巻]、1873頁。

21）小学館、前掲辞典[第二巻]、215頁。“しあわせ”を漢字にすると、“仕合わせ”と“幸”の2つが示されている（同上）。“仕合わせだ”というように形容動詞化するときには、“運がよいこと”や“幸福”の様子を示すが、“仕合わせする”というように動詞化するときには、“幸運にめぐりあう”や“運が向く”や“うまい具合にいく”を意味する（同上）。

22）同上、215頁。

23）同上、264頁。

24）松村監修、前掲辞典[上巻]、1578頁。“仕組む”の定義として、“企てる”や“内々に計画を立てる”を示す以外に、演劇論的文脈において、“小説・戯曲などの筋を組み立てる”や“趣向を考える”が示されている（同上）。

25）山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄編『新明解 国語辞典 第七版』2013年第三刷（1972年初版）、三省堂、621頁。傍点は引用者強調。

26）松村監修、前掲辞典[上巻]、1578頁。

27）同上、1586頁。“仕込む”の第一の定義としては、“教えてしっかりと身につけさせる”や“しつける”が示されている（同上）。なお、“しこめる”という言葉は、“囲んで作る”と“垣などを巡らす”と定義される（同上）。

28）小学館、前掲辞典[第二巻]、277頁。

29）松村監修、前掲辞典[上巻]、1586頁。

30）小学館、前掲辞典[第二巻]、277頁。

31）同上、237頁。

32）松村監修、前掲辞典[上巻]、1563頁。“仕掛ける”の単純な意味としては、“動作・作用をしはじめる”や“何かをしはじめて、その中途である”という意味がある（同上、1564頁）。

33）山田他編、前掲辞典、615頁。

34）松村監修、前掲辞典[上巻]、1563頁。なお、この辞書では、“仕掛ける”の定義として、“仕向ける”が明示されている（同上）。ここでは、“仕向ける”が、“相手がそれに応じた行動をとらざるを得ないような働きかけをする”という強い意味があることを付記しておく（山田他編、前掲辞典、同上、659頁）。

35）松村監修、前掲辞典[上巻]、1563頁。

36）小学館、前掲辞典[第二巻]、214頁。

37）筆者は、「新たに生じた現実」に対して“新現実”という名辞を与えている（佐々木、前掲論文[2016年]、167～168頁）。

38）「実践」に対する評価の基本的視点については、以下の拙稿を参照のこと。佐々木英和「実践の評価手順に関する理論的考察－『計画-実践-評価』の循環的関係－」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部 教育実践紀要』第3号、2017年所収、262～264頁。

39）松村監修、前掲辞典[下巻]、3744頁。

40）松村監修、前掲辞典[上巻]、1136頁。

41）山田他編、前掲辞典、450頁。

42）同上。なお、引用部分は、原文では空白になっている「結果」を補っている。

43）松村監修、前掲辞典[上巻]、1136頁。

44）山田他編、前掲辞典、450頁。

45）小学館、前掲辞典[第一巻]、1858頁。傍点は引用者強調。

46）松村監修、前掲辞典[上巻]、1197頁。

47）山田他編、前掲辞典、480～481頁。ちなみに、“結果的”は、“一連の事柄について結果の面から判断を下す様子だ”と定義されている（同上、450頁）。

48）松村監修、前掲辞典[下巻]、1987頁。

49）小学館、前掲辞典[第一巻]、1426頁。“ぎゃっこうか”と読む“逆効果”は、“ぎゃくこうか”とも読める（同上、1421頁）。

50）小学館、前掲辞典[第二巻]、346頁。「実効」は、他には“実際的な効能や効験”とか、“ほんとうのききめ”や“まことのしるし”といった定義が与えられている（同上）。

51）小学館、前掲辞典[第一巻]、1863頁。傍点は引

用者強調。

52）山田他編、前掲辞典、480頁。傍点は引用者強調。

53）同上、806頁。傍点は引用者強調。

54）小学館、前掲辞典[第三巻]、967頁。“目的”とは、英語の“end の訳語”としては、“哲学で、実践的な意志が選んで立てた行為の目標”と定義されて、“行為はこの手段となる”と位置づけられており（同上）、“アリストテレスの形而上学で、事実が何のために存在するかを表わすもの”である（同上）。

55）山田他編、前掲辞典、1499頁。傍点は引用者強調。

56）「期待される成果（expected outcome）」と「望ましい成果（desirable outcome）」とが、それこそ結果的に一致することもありうるが、両者は原理的に別物である。これに関して、「予期」と「期待」、「成果」と「結果」との関係を意識しながら、以下の拙稿を参照のこと。佐々木英和「会議ファシリテーションの進行手順に関する基盤的考察－『現実』と『理想』とを架橋する『方法』の理論的意味－」、宇都宮大学教育学部附属教育実践総合センター編『宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要』第37号、2014年所収、291頁。

57）“成功”には、“物事を目的どおりに成し遂げること”という定義がある（松村監修、前掲辞典[下巻]、1993頁、傍点は引用者強調）。このように、「成功」は、「目的」が大本の基準になって定まる概念である。なお、「理論の正否」と「実践の成否」とは、それこそ論理的に分けて考えるべきである（佐々木、前掲論文[2016年]、164～165頁）。

58）松村監修、前掲辞典[下巻]、3147頁。

59）小学館、前掲辞典[第一巻]、239頁。“孫生え”と表記される“ひこばえ”は、“切った草木の根や株からはえ出た芽”である（同上）。

60）筆者は、“問題発生に対する対策”と“設定課題のための方策”とを対比して考えている（佐々木英和「生産的な合意形成に至るための思考手順に関する一考察－『現実の明瞭化』・『理想の明確化』・『方法の明快化』－」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部 教育実践紀要』第1号、2015年所収、148頁）。

61）小学館、前掲辞典[第一巻]、1715頁。

62）山田他編、前掲辞典、903頁。

63）松村監修、前掲辞典[下巻]、2254頁。“建前”は“原則として立てている方針”と定義される言葉である（同上）。「建前にすぎない」という否定的な言い方をされることも多いが、それは、はじめから否定的なニュアンスで用いられていたものではない。むしろ、「建前」という言葉が否定的に使われることが多いという「実践実態」こそが根本から問われるべきだというのが、本稿の基本姿勢である。なお、「建前」と対比して用いられがちな“本音”は、“本心から言うことば”とか“本当の気持を言うことば”と定義されているが、“口に出して言うことがはばかられる本心”という意味もある（小学館、前掲辞典[第三巻]、680頁）。

64）“他意”とは、“心の中に隠している別の考え”のことであり、“特に、相手に対する悪意”を指し、“ふたごころ”を意味することもある（松村監修、前掲辞典[下巻]、2166頁）。なお、“ふたごころ”とは、“味方や主君にそむく心”とか“裏切りの心”を意味する（同上、3171頁）。

65）小学館、前掲辞典[第一巻]、1042～1043頁。

66）松村監修、前掲辞典[上巻]、682頁。

67）山田他編、前掲辞典、257頁。

68）松村監修、前掲辞典[上巻]、877頁。

平成29年 10月31日 受理

A Consideration of the Process of Operating Practice Theory: Realistic Necessity for Paying Attention to the Relationship between “Objective” and “Effect”

Hidekazu SASAKI*
* Center for Education and Research of Community Collaboration, Utsunomiya University